

## 寒露と気温（協同組合通信・井戸端論弾） 14.10.07

古代中国に生まれ、今日の日本の生活に季節感を与えてくれる文化に24節気（にじゅうしせっき）がある。

約2600年程前の黄河の中・下流域の気候によっているといわれる。地理的相違を考慮しても、近代のエネルギー消費文明の先端をゆく今の日本とは、かなり気候のずれがありそのまま適用できないが、その名称は変わらない。

24節気の定義は、時代と共に変化している。旧暦が、月の運行を基とした「純粹太陰暦」から太陽の運行を基に修正した「太陽太陰暦」に変化したこと。天球を巡る地球の軌道が楕円であることが知見され、運行速度が一定でないこともわかった。そこで、1太陽年を時間で等分した「時間分割法」から太陽が天球を1年かかって一周する黄道を黄経で案分した「空間分割法」へと修正され現在に至る。

今年10月の最初の節気は、8日の寒露である。この意味は、「露が冷気によって凍りそうになる」といい、大陸の広大な荒野の冷え冷えとした季節を迎えるスケールの大きさを想わせる。今の日本ではなかなか実感を伴わないが、深まる秋の冷気で、野草や路地野菜が露で冷たくなる頃と解釈できるだろう。

この時分、つるべ落としに日が短くなり、それにつれ気温も急速に低下してゆく。1日の最低気温が、8を下回って来ると各地で紅葉や黄葉が野山を鮮やかに彩り、秋の行楽シーズンの訪れである。

観光地に近い各地の最低気温が、最初に8になる日を、最近の10年間の気象データで調べてみた。阿寒湖の釧路10月4日、奥入瀬の青森10月20日、山寺の山形10月18日、いろは坂の日光9月28日、神宮外延の東京11月25日、室生寺の奈良11月4日、後樂園の岡山11月17日、中津渓谷の高知11月19日、大山の鳥取11月4日、英彦山の福岡11月24日、霧島の鹿児島12月4日。日光と奈良を除いて、各地とも20年前の平年値より数日から10日程遅くなっている。これも温暖化の1つの証左と思われる。

イロハカエデが色ずいて行く地点を結んで、紅葉前線という。日本列島を約60日で駆け巡るこんな前線なら大歓迎だ。収穫期の繁忙な農家が、秋の1日をたまにはゆっくりリフレッシュし、安全な作物を食卓に届けて欲しいものである。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）